

初級日本語学習者に対する B. Bloch のアクセント教育の評価
—— *Spoken Japanese* を分析して ——

An Evaluation of B. Bloch's Accent Education for Beginner Learners of
Japanese
—— Analyzing *Spoken Japanese* ——

池田菜採子 (名城大学 外国語学部)
IKEDA, Natsuko, Faculty of Foreign Studies, Meijo University

要約

言語学者 Bernard Bloch は戦時中のアメリカで日本語研究を行い、アメリカの軍人が口語を習得するための日本語教科書 *Spoken Japanese* を 1945 年に著した。この教科書は日本語がローマ字で表記され、全ての語、例文にアクセントが付けられていた。この時代、日本国内では国語学者によって口語のアクセント研究が徐々に始まりつつあったものの、日本語教育という観点からアクセントの説明を行おうと試みた業績はほとんど見当たらない。本稿では Bloch が日本語アクセントをどのように日本語学習者に向けて説明したか詳しく考察する。

Linguist Bernard Bloch conducted research on the Japanese language in the United States during the Pacific War and published *Spoken Japanese* (1945), a Japanese language textbook for American military personnel to learn the spoken Japanese language. In this textbook, Japanese was written in Romaji, and accents were placed on all words and example sentences. During this period, although research on colloquial accents was gradually starting by Japanese linguists in Japan, few attempts had been made to explain accents from the perspective of Japanese language education. In this paper I evaluate in detail how Bloch explains the Japanese accent to beginner learners of Japanese.

キーワード: Bernard Bloch, *Spoken Japanese*, 初級日本語学習者, アクセント教育, 日本語教育史

1. はじめに

言語学者 Bernard Bloch は戦時中のアメリカで日本語研究を行い、アメリカの軍人が口語を習得するための日本語教科書 *Spoken Japanese* (以下、SJ と略記) を 1945 年に著した。アメリカ構造言語学を代表する言語学者の一人であり、また音声学者であった Bloch だが、日本語のアクセント研究には随分と苦戦を強いられたことは池田 (2023) で述べたとおりである。しかしアクセント研究の初期には苦戦した Bloch であったが¹、SJ の中では日本語学習者に向けて見事にアクセントを説明している。また SJ で取り上げられている語、例文には全てアクセントが付けられている。SJ 以前の日本語教科書でアクセントに言及が見られるものは、Yamagiwa (1942)

を除いては、ほとんど見当たらない。その意味において SJ は非常に画期的な教科書であったと言える。本稿の目的は、Bloch が学習者に向けて行ったアクセントの説明を詳しく考察し、日本語教育史における Bloch のアクセント教育の意義を明らかにすることにある。

2. 20 世紀前半頃の日本国内でのアクセント研究概観

日本国内では中世の『天爾葉大概抄』を始め、書き言葉の文法を中心とした研究が国語学者によって行われてきた。そのため山田孝雄、橋本進吉など名立たる国語学者の業績を見ても、アクセントの研究は見つからない。話し言葉の研究は書き言葉に比べ随分と立ち遅れていた。上田萬年の「標準語に就きて」が発表されたのは 1895 年のことだが、標準語²は書き言葉から徐々に統一されていき、話し言葉の統一までには暫しの時間が必要だった。このあたりの事情について、神保格・常深千里『國語發音アクセント辭典』には次のような記述が見られる。

(2-1)

さて『書き言葉』がこれほどまでに統一されて来たにも拘らず、一方『話し言葉』の方はどうであるか。一たびこれを発音した場合には、或いは上方訛り、或いは東北訛り、或いは九州訛りといふやうに、地方人は各自思ひ思ひの発音をして、少しも纏まりがないという實状である。発音の相違といふのは、おもに音韻の相違と、アクセントの相違とである。(中略) 音韻の誤りは從來矯正策も講ぜられてゐるけれども、アクセントの問題に至つては、今まで殆ど放任されて来たかの觀がある。

(神保・常深, 1937, p. 8)

国語学的観点からのアクセント研究としては佐久間鼎が先駆けて 1917 年に『国語のアクセント』を著しており、その後も何本か論文を執筆している。その後、神保格、服部四郎、金田一京助、有坂秀世などが論考を発表しアクセント研究が盛んになっていった。

また放送用語の観点からは三宅武郎がアクセント研究を行っている。塩田 (2014, p. 252) は、三宅が「東京のアクセントに関して 1924 (大正 13) 年から築地・日本橋・京橋の下町方言を中心に調査をおこなってカードに採集した。カードの枚数は 1930 年 (昭和 5) 年の時点で 4 万 2,000 枚に達したとのことである」、「1934 (昭和 9) 年に発足した日本放送協会の放送用語委員会には、当初から囑託の用語調査係員として従事していた」と述べている。塩田 (2014, p. 251) によると「三宅は吉沢義則編 (1938) 『アクセント表示 新辞海』のアクセント記述担当者であり、日本放送協会編 (1943) 『日本語アクセント辞典』の編纂主任で」あったという。三宅はこの他、国民学校の国語の教科書の全文にアクセントを表示し、解説を付けた『國民學校アクセント解説』を 1943 年に著している。

またこの頃、東京外国語学校 (現在の東京外国語大学) の音声学実験室では、千葉勉によって電磁オシログラムを使ったアクセント研究が行われていた。東京外国語大学のウェブサイトによると、千葉勉はロンドン大学で音声学者 Daniel Jones の授業を受講していたという。実験音声学上のアクセント研究の成果は Chiba (1935) に見ることができる。

3. 20 世紀前半頃の日本語教育におけるアクセント教育概観

SJ 以前の日本語教科書でアクセントに言及が見られるものはほとんど見当たらない。やはり文法や述語の活用の説明を追求した教科書が多く、話すことを目的として書かれていないことが原因であろう。これまで

Baba(1873)、Chamberlain(1888)、Tatsumi(1936)、Suski(1942)、Henderson(1943)、Naganuma(1950)などを筆者の研究の中で取り上げてきたが、いずれの教科書にもアクセントの説明は見られず、また語や例文にアクセントが付されていない。ただ Yamagiwa(1942)だけは語にアクセントを付して、‘Word tone’ という項目でアクセントを説明している。以下、Yamagiwa の説明を紹介する。Yamagiwa によると日本語のアクセントは低・中・高の3段階のピッチがあると言う。そして英語が強弱アクセントであるのに対して、日本語は高低アクセントであることを説明した後、アクセントの弁別機能に触れている。

(3-1)

The normal ear catches three well-defined degrees of pitch -low, mid, and high- when words are pronounced by themselves. It is this pitch accent which usually distinguishes a word from another word that is spelled similarly. If two words of the same combination of consonants and vowels possess identical pitch patterns, they can be distinguished only in terms of the context in which they appear or in terms of the Chinese characters used in writing them.

(Yamagiwa, 1942, p. 5)

(拙訳) 語がそれ自体単独で発音されるとき、普通の耳では低、中、高の3段階のピッチを捉えることができる。同じように綴られる語が別の語であるかどうかはアクセントによって区別される。もし同じ子音と母音の組み合わせの2語が同じアクセントを有していたら、その違いは文脈または漢字によって区別される。

続いていろいろなアクセント型を紹介している。

(3-2)

a. The following words have high pitch on the first syllable and low on the second and succeeding syllables: *ima*, the present, now

b. Most interrogative pronouns have high pitch on the first syllable: *Dôre desu ka?* Which is it? *Nâni desu ka?* What is it?

c. The following words have low pitch on the first syllable and high pitch on the second and following syllables: *hanâ*, flower

d. The following words have low pitch on the first syllable and medial pitch on the second and succeeding syllables. In these cases there is no marking for pitch. It is to be assumed that the first syllable is pronounced at low pitch. The pitch is raised on the second and succeeding syllables, but not so much as in c above. (The interval between low and medial pitch is sometimes indistinguishable, in that a low pitch tends to become accommodated to a higher pitch that immediately follows.): *hana*, nose

(Yamagiwa, 1942, pp. 5-7)

(拙訳) a. 以下の語は1拍目が高く、2拍目以降が低い。例：今

b. 疑問詞の多くは1拍目が高い。例：どれですか、何ですか

c. 以下の語は1拍目が低く、2拍目以降は高い。例：花

d. 以下の語は1拍目が低く、2拍目以降は中ピッチである。この場合、アクセントマークを付けないが、最初の拍は低いと想定される。2拍目以降は上がるが、cほどは上がらない。時に低ピッチと中ピッチの間は区別がつかない。なぜなら低いピッチがすぐ後に続く高いピッチに順応する傾向があるからである。例：鼻

ここまで(3-2)の a が起伏式アクセント（頭高型）、c が起伏式アクセント（尾高型）、d が平板式アクセントである。Yamagiwa には起伏式アクセント（尾高型）「花」の方が平板式アクセント「鼻」より上がり方が大きいと感じられたため、アクセントを3段階に分けたようである。なお、ここではこれらを区別するために、後ろに助詞を付けてみるなどといった説明は見られない。Yamagiwa の説明は更に続く。(3-3)はアクセントの規則であり、(3-4)は起伏式アクセント（中高型）の説明である。

(3-3)

If a word begins with a syllable at low pitch, the second is medial or high. If a word begins with a syllable at high pitch, the second and succeeding syllables are low.

(Yamagiwa, 1942, p. 7)

（拙訳）1 拍目が低ければ、2 拍目は中または高ピッチである。1 拍目が高ければ、2 拍目以降は低ピッチである。

(3-4)

In the foregoing examples, the pitch of the second syllable, whether high or low, persists throughout a polysyllabic word. In other cases, a high pitch on the second and following syllables is followed by a drop to lower pitch at a later syllable.

a. Words in which a high second syllable is followed by a drop on the third syllable: *natáne*, mustard seed

b. Words in which high second and third syllables are followed by a drop on the fourth syllable: *otókónoko*, boy child

c. Words in which high second, third, and fourth syllables are followed by a drop on the fifth syllable: *komámónóya*, a novelty shop; a fancy goods store

(Yamagiwa, 1942, pp. 7-8)

（拙訳）ここまでは2拍目が高いか低いかに関わらず、2拍目の高さが語の最後まで続く語であった。他に、高いピッチの2拍目の後、高さが下がって、低いピッチの拍が続く場合もある。

a. 2拍目が高く、3拍目が下がって低くなる語。例：菜種

b. 2拍目、3拍目が高く、4拍目が下がって低くなる語。例：男の子

c. 2拍目、3拍目、4拍目が高く、5拍目が下がって低くなる語。例：小間物屋

次に1拍語のアクセントについて、語自体からアクセントを知覚することは難しいが、文中に現れるとアクセントがわかり、2種類のアクセントがあることを指摘している。

(3-5)

A monosyllabic word is pronounced either at high pitch or at low pitch. When such words are pronounced by themselves, the distinctive pitch is difficult perceive. But when such words are heard in sentences the contrasts afforded by the adjacent syllables tell us what degree of pitch has been used.

a. The following monosyllabic words are pronounced at high pitch: *hi*, fire

b. The following monosyllabic words are pronounced at low pitch: *hi*, sun

(Yamagiwa, 1942, p. 8)

(拙訳) 1 拍語も高いピッチか低いピッチで発音される。それらの語は単独で発音されると特徴的なピッチを知覚することは難しい。しかし文の中で聞くと、隣接する拍がどのようなピッチが使われているか、その高さの程度を教えてくれる。

a. 以下の 1 拍語は高いピッチで発音される。例：火

b. 以下の 1 拍語は低いピッチで発音される。例：日

(3-5) の a. は起伏式尾高型で b. は平板式の語である。1 拍語が文中で現れた場合の例として「日／火に焼ける」「気／木に掛ける」「名を付ける／菜を漬ける」を挙げている。

Yamagiwa は最後に、会話の中では高いピッチと低いピッチの差が増えたり減ったりすることがあることを指摘しつつ、一語一語、アクセントの観点から学ぶことが必要だと述べている。以上が Yamagiwa (1942) の日本語アクセントの記述である。筆者が調べた限り、これが日本語教育の観点から見て、最初に学習者に向けて行われたアクセントの説明である。

補足として、Yamagiwa はこの後、アクセントと同じ Word Tone の説明の枠組みの中で、イントネーションについても触れている。イントネーションには下降、中立、上昇の 3 パターンがあるとし、下降や上昇は文の最後の拍の中だけで生じるという、英語とは違った日本語特有の特徴を指摘している。そうした説明は最初日本語学習者に大変有益な情報であり、英語にも日本語にも精通した Yamagiwa ならではの気づきだと言えよう。

Bloch (1950, p. 86) は Yamagiwa (1942) を読んだことを明記し、最近の研究で役に立った著書としても Yamagiwa (1942) を挙げている。しかし Bloch がそれを読んだのは SJ 執筆以前だったのかどうかは定かではない。

4. Bernard Bloch の日本語学習者に向けたアクセント教育

Bloch は SJ の各課の Pronunciation Practice で日本語の母音、子音それぞれの発音、アクセント、イントネーション、母音の無声化まで多岐に渡る音声学的説明を学習者に向けて行った。第 5 課のアクセントの説明は、以下のように拍の説明から始まる。英語話者が感じた英語と日本語の拍感覚の違いが、大砲と機関銃を例えとして紹介されていて大変興味深い。

(4-1)

The accented syllable of a word or phrase is more prominent than the syllables around it. In English it is LOUDER than the rest; in Japanese it is no louder, but is spoken in a HIGHER PITCH. In English, the difference in loudness between accented and unaccented syllables is considerable. The accented syllables stand out like peaks; in talking, we jump from peak to peak, and slur over the syllables in between. In Japanese, all syllables are pronounced with about equal force. They run along evenly and smoothly, with no peaks of loudness and no slurring. The only thing that makes an accented syllable different from the rest is the slightly higher pitch of the voice. An English sentence is like an artillery barrage; a Japanese sentence is like machine-gun fire.

(Bloch & Jorden, 1945, p. 123)

(拙訳) 語や句のアクセントのある拍は、他の拍より際立っている。英語ではアクセント拍は他より強く聞こえる。日本語のアクセント拍は強くはなく、高いピッチで発音される。英語ではアクセント拍とアクセントのない拍との間の強さの違いは明らかである。アクセント拍は頂点のように突出していて、話す時には頂点から頂点にジャンプして行き、その間の拍は不明瞭に発音される。日本語では全ての拍は同じ強さで発音される。それらは均等かつ滑らかに流れて行き、強さの頂点や不明瞭さはない。アクセント拍が他の拍と違う唯一の点は、声が少し高いピッチであることだけである。英語の文は大砲の砲撃のようであり、日本語の文は機関銃のようである。

続いて Bloch は日本語アクセントの高いピッチと低いピッチを音調に例えている。

(4-2)

On the average, an accented syllable in Japanese is about two musical tones higher than a following unaccented syllable. (This is the interval between the first two notes of the song “Good Night Ladies” .)

(Bloch & Jorden, 1945, p. 123)

(拙訳) 平均して日本語では、アクセントのある音節は、直後のアクセントのない音節より約 2 音階高い。(これは “Good Night Ladies” の [gud] と [nait] の隔たりである。)

“Good Night Ladies” はアメリカの音楽家 Edwin Pearce Christy が作曲したフォークソングで、1867 年に発表された。原曲はト長調で、最初の 2 つの音符は「シ」と「ソ」である。Bloch には高いピッチが「シ」、低いピッチが「ソ」と音調にして 3 度の差に聞こえたようである。英語話者には日本語がこのような聞こえていることは大変有益な情報である。

次に Bloch は日本語を学習する上でアクセントを覚えていくことがいかに大切かを説いている。Bloch 以降の日本語教育では、Mizutani (1977) を除けば、特に初級においてはアクセント教育が重視されていないと言わざるを得ない状況にある。日本語学習者もまた、アクセントを 1 つ 1 つ丁寧に覚えようとしていない。Bloch の教科書は漢字を使わず、「暑い」と「厚い」はアクセントによってのみ区別されるので、より一層話し言葉を習得する上でのアクセントの大切さを強調したのかもしれないが、Bloch のメッセージを現在の日本語教育に従事する者として真摯に受け止めたい。

(4-3)

The presence or lack of an accent, and position of the accent when there is one, are just as much a part of the word as the vowels and consonants, and should be learned in the same way for every word you meet. For instance, it is not enough to know that háru ‘spring’ and natú ‘summer’ have different consonants. Unless you remember that they are accented differently, you have learned only a piece of each word.

Some words in Japanese are distinguished from other words by the accent alone: atúi means ‘hot’ ,but atui, with no accent, means ‘thick’ (as a coat or a book)’. Such pairs are not very common, to be sure; but even if the presence or lack of an accent does not serve to distinguish one word from another, it is still part of the word.

A misplaced or omitted accent will not make your speech as hard to follow as a wrong vowel or consonant. But if you simply disregard accents- if you leave them out where they belong, or put them

in where they don' t belong, or place them on the wrong syllables- your hearer may have some trouble in understanding you and will certainly be disturbed by the queerness of your speech.

(Bloch & Jorden, 1945, pp. 123-124)

(拙訳) アクセントの有無、アクセントがある場合はアクセントの位置は、母音や子音と同じように単語の一部であり、新しい語に出会ったら、どの語に対しても同じように覚えていかなければならない。例えば春と夏は(母音は同じだが)子音が違う。しかしアクセントも違うことを覚えられない限りは、語の一部を学んだに過ぎない。日本語にはアクセントだけが違う語がある。暑いと厚いはアクセントだけが異なる。そうしたペアは決して多くはないが、アクセントの有無の違いが語を弁別することを覚えておかなければならない。アクセントもまた語の一部である。アクセントを間違ったところに置いたり、省略したりしたとしても、子音や母音を間違えたときほどには聞き取りにくくはならない。しかしアクセントを軽視、つまりアクセントを本来あるべき音節ではないところに置いたりしたら、聞き手は理解するのが難しくなるし、あなたの変な発話に困惑するだろう。

続いて Bloch は平板式アクセントと起伏式アクセントの尾高型の判別方法に言及している。Yamagiwa は 1 拍語の場合のみ、文中で発音されると隣接語とのピッチの違いがわかると述べていたが、Bloch は 1 拍語にとどまらず 2 拍以上の語においても平板式アクセントと起伏式アクセントの尾高型に言及した。池田(2023)で述べたとおり、Bloch の初期のアクセント研究では、両者の混同が非常に多く見られた。SJ を執筆する段階においてはその違いが完全に明らかになったことがうかがえる。

(4-4)

When an accent falls on the last syllable of a word and there happens to be no other word after it in the same phrase, the accent is usually inaudible, since there is no chance for the drop in pitch that identifies the accented syllable. For this reason, a word with accent on the last syllable, when pronounced by itself, sounds just like a word without any accent. To test whether such a word has an accent or not, all you have to do is put a particle or some other word after it. If there is an accent on the last syllable of the word, you will hear a drop in pitch from that syllable to the following particle; if there is no accent, the last syllable of the word and the particle will be spoken on the same pitch.

(Bloch & Jorden, 1945, p. 124)

(拙訳) 語の最後の拍でアクセントが下がるけれども、次に続く語がない場合、アクセントが下がるチャンスがないため、普通、アクセントが聞こえなくなる。この理由によって、語が単独で発音されると、最後の拍にアクセントがある語もアクセントがない語と同じように聞こえる。アクセントがあるかないかを確かめるために、助詞または他の語をその語の直後に置いてみる。最後の拍にアクセントあるとき、次に続く助詞のピッチが下がる。アクセントがなければ、最後の拍と次の助詞は同じピッチで発音される。

Bloch はこのように語の文中での振る舞いから平板式アクセントと起伏式アクセント尾高型の区別ができることを述べた。これは Yamagiwa(1942)には見られなかったものである。それにとどまらず、後続する助詞によってアクセントの現れ方が変わるという、日本語話者でさえなかなか気が付きにくいことにまで言及している。

(4-5)

Certain nouns lose their accent before the particle *no*. Compare *Nihón* with *Nihon no húne*, or *matí* with *matí no koobá*. The particle *kára*, *máde*, *kéredomo* have an accent, but this appears only when the preceding word has no accent of its own: *Beikoku máde*, but *Nihón made*.

(Bloch & Jorden, 1945, pp. 126–127)

(拙訳) ある名詞は助詞「の」の前でアクセントを失う。「日本」と「日本の船」、「町」と「町の工場」を比べてみよう。また助詞「から」「まで」「けれども」はアクセントを持っているが、アクセントがない語に後続した場合にだけアクセントが現れる。つまり「米国まで」「日本まで」では「米国まで」の時だけアクセントが現れる。

次に、Bloch は日本語アクセントの規則を述べている。このことは(3-3)、(3-4)で引用したとおり Yamagiwa (1942) でも述べられている。

(4-6)

WITHIN A WORD, ALL SYLLABLES THAT COME BEFORE THE ACCENT, EXCEPT THE FIRST, ARE SPOKEN ON THE SAME HIGH TONE AS THE ACCENTED SYLLABLE ITSELF. As a result of this, when the accent falls on the third or any later syllable of a word, the high pitch begins with the second syllable and lasts without interruption through the accented syllable. If the accent is on the 3rd syllable, the 2nd and 3rd are both high; if it is on the 4th, then the 2nd, 3rd, and 4th are high. The FIRST syllable in such a word, and all the syllables AFTER the accent, are low.

(Bloch & Jorden, 1945, p. 125)

(拙訳) 語の中で、最初の拍を除いて、アクセントの前に来る全ての拍は、アクセントのある拍と同じ高いピッチで発音される。その結果、アクセントが3拍目またはそれより後の拍で下がる時、高いピッチは2拍目から始まり、中断なくアクセントのある拍まで続く。つまりアクセントが3拍目にあるなら、2拍目と3拍目が高いピッチになる。アクセントが4拍目にあるなら、2拍目、3拍目、4拍目が高いピッチになる。最初の拍と、アクセントより後の拍は低いピッチになる。

Bloch はこのアクセントの規則を次に引用するように図式化したところが大変興味深い。この図は日本語アクセントを視覚的に表していて、学習者にとって非常にわかりやすいものであっただろう。

(4-7)

The following table will help you to visualize this principle. In the table, the letter *o* is used to represent a syllable –any syllable. A small *o* stands for a syllable spoken on a low pitch; a capital *O* stands for a syllable spoken on a high pitch; a capital *O* with an accent mark over it (*Ó*) stands for the accented syllable of a word. Thus, the formula *oOóoo* stands for any five-syllable word with an accent on the third syllable (for instance *arimásita*)

(Bloch & Jorden, 1945, p. 125)

(拙訳) 次の図はこの原則を視覚化したものである。図で文字 *o* は拍を表すものとして使われている。小文字 *o* は低いピッチ、大文字 *O* は高いピッチで発音される。アクセントのある拍は *Ó* と表してある。従って、*oOóoo* は5拍の語で、3拍目にアクセントがある語を示している。(例えば「ありました」)。

NUMBER OF SYLLABLES:	1	2	3	4	5	6
No accent.	o	oo	ooo	oooo	ooooo	oooooo
Accent on 1st. . . .	Ó	Óo	Óoo	Óooo	Óoooo	Óooooo
Accent on 2nd. . . .	o	oÓ	oÓo	oÓoo	oÓooo	oÓoooo
Accent on 3rd.	o	oo	ooÓ	ooÓo	ooÓoo	ooÓooo
Accent on 4th.	o	ooo	oooÓ	oooÓo	oooÓoo	oooÓooo
Accent on 5th.	o	oooo	ooooÓ	ooooÓo	ooooÓoo	ooooÓooo
Accent on 6th.	o	ooooo	oooooÓ	oooooÓo	oooooÓoo	oooooÓooo

図 1. Bloch の日本語のアクセント規則 (Bloch & Jorden, 1945, p. 126)

最後に Bloch は、日本語のアクセントは基本的にはそれぞれの語自体が持っているものだが、時に文中でアクセントを失ったり、逆にアクセントを得る場合があるという指摘をしていることは大変興味深い。アクセントを失う場合の例として「ます」「です」という無声化が起きる拍を含む語を挙げ、それぞれ例文を提示している。

(4-8)

Some other words, however, lose their accent under certain conditions in the sentence. The most important of these are verbs ending in *-másu*, and the copula *désu*. When a verb like *arimásu* stands at the end of a sentence, the final *u* is normally not pronounced, and no syllable heard after the accent. As already mentioned, an accent is audible only if there is a following syllable to furnish a contrast. Compare the following sentences: (a) I' ve got book. *Hón ga arimasu*. (b) Have you got a book? *Hón ga arimásu ka?* (c) I' ve got a book, but no magazine. *Hón wa arimásu ga, zassi wa arimasén*. The form *arimasu* in sentence (a) has no accent. *Arimásu* in sentence (b) keeps its accent because the following particle *ka* provides a contrasting low-pitched syllable. *Arimásu* in sentence (c) keeps its accent because here the final *u* of this word is fully pronounced.

(Bloch & Jorden, 1945, p. 126)

(拙訳) 文の中ではある状況下でアクセントを失う語がある。そのうち最も大事なものは「ます」で終わる動詞と繫辞の「です」である。「あります」のような動詞が文の最後に来るとき、最後の *u* は通常発音されないで、アクセントの後、拍が聞こえない。既に述べたように、アクセントは後続する拍が対比を与えるときのみ聞こえる。次の文を比べてみよう。(a) 本があります (b) 本がありますか (c) 本はありますが、雑誌はありません。(a) の「あります」はアクセントを持たない。(b) は後続助詞「か」が低いピッチの拍との対比をもたらすので、アクセントが保たれる。(c) は、最後の *u* がはっきり発音されるため、アクセントが保たれる。

また、文中で逆にアクセントを得る場合として、指示詞、助詞「の」、動詞形を挙げている。

(4-9)

Less commonly, a word that has no accent of its own gets one in combination with certain other words. The pre-nouns *kono*, *sono*, *ano* usually have no accent; but before the noun *hito*, they often acquire one: *anó hito*, etc. The particle *no* acquires an accent in the combination *watakusi nó desu*. Before certain particles, verb forms that are normally without accent get an accent on the last syllable: *itte* 'going', but *itté kara* 'after going'. In the spelling of the Basic Sentences, accents are marked only if they are present in the particular combination shown. Don' t be disturbed if you

see the same word spelled sometimes with an accent, sometimes without one; the explanation is that the word is pronounced in both ways, depending on the combination in which it appears.

(Bloch & Jorden, 1945, p. 127)

(拙訳) そんなに多くはないが、他の語と結合することで、新たにアクセントを得る場合がある。指示詞の「この」「その」「あの」は通常アクセントを持たない。しかし名詞「人」の前ではアクセントが現れる。また助詞「の」は「私のです」のような場合、アクセントを持つ。ある助詞の前で、通常アクセントを持たない動詞形がアクセントを持つこともある。「行ってから」は「て」にアクセントを新たに得る。この教科書では、文中の状況下でアクセントがある場合にのみ記号を付けている。同じ語であるのに、ある時はアクセントがあり、ある時はアクセントがなくても混乱しないほしい。語が結合することで、その語は2通りに発音されるのだ。

以上が Bloch が日本語学習者に向けて行った日本語アクセントの説明である。Bloch がいかに日本語の音声と真剣に向き合い、分析を行ったかが伝わってくる。とりわけ文中でのアクセントの振る舞いを鋭く観察し、分析の結果を学習者に提供しているのは、研究と教育が一貫していることを証明している。ただ初級の学習者にここまで細かい説明が必要であるかどうかは一考の余地があるだろう。これを読んだ日本語学習者は、日本語アクセントがあまりに規則性がなく複雑だと感じ、日本語習得そのものを断念したくなってしまうのだろうか Bloch は理論を全て丁寧に説明した上で、最終的には ‘Imitate your Guide in everything he says, accents and all’ (Bloch & Jorden, 1945, p. 127) (拙訳: アクセントを含め全てにおいて日本語ガイド³が言ったことを真似しなさい) と述べている。説明を尽くした上で、アクセントの実態を知ることが日本語ガイドの手に委ねたのは科学的な態度であると言えるだろう。いずれにせよ、戦時中のアメリカで日系人インフォーマントだけを相手に、日本語母語話者の筆者でさえ普通は気がつかないような細かい分析を行った Bloch は、アメリカ伝統のプラグマティズムに支えられた理論実践家であったのだろう。

5. まとめ

以上、考察してきたように、日本語教育という観点から見て、日本語学習者に向けて日本語アクセントの説明が行われたのは、Yamagiwa (1942) が最初であった。しかし Yamagiwa (1942) のアクセントの説明は語レベルにとどまっていたと言える。これを語から語が文中で現れた場合の振る舞いにまで深めた説明を行ったのが Bloch である。SJ での実践は、共著者である E. H. Jorden に引き継がれ、*Beginning Japanese* を経て、*Japanese: The Spoken Language* によって集大成される。その追跡調査を今後の課題としたい。

注

1. Bloch がアクセントを監修したとされる Rose-Innes の語彙集の第2版では、明らかにアクセント表記が異なっているものが347個もあったことは池田 (2023) で述べた。大変な苦勞が伺われる。
2. 現在では標準語より共通語と呼ばれることが多い。
3. この教科書は日本語母語話者をガイドと呼び、ガイドの発音を真似することが前提となっている。ガイドが見つからない場合に備えて、付属レコードが作られたことは池田 (2016) で述べたとおりである。

引用文献

池田菜採子. (2016). 「バーナード・ブロックの Spoken Japanese 付属レコードに関する研究」『日本研究』, 52, pp. 101-135.

- 池田菜採子. (2023). 「Bernard Bloch の日本語アクセント研究の原点」『名城大学外国語学部紀要』, 6, pp. 127-138.
- 佐久間鼎. (1917). 『国語のアクセント』東京：心理學研究會出版部
- 塩田雄大. (2014). 「終戦前の辞典に示された複合動詞のアクセントをめぐって―一帰納的記述と演繹的規範―」『国立国語研究所論集』, 7, pp. 251-264.
- 神保格・常深千里. (1937). 『國語發音アクセント辭典』東京：厚生閣.
- 三宅武郎. (1943). 『國民學校アクセント解説（第一學年用）』, 東京：國語文化研究所.
- Baba, T. (1873) *An Elementary Grammar of The Japanese Language*. London: Trübner, Reprinted at 2009 by Routledge.
- Bloch, B. (1950) Studies in colloquial Japanese IV, *Language* Vol.26, New York: Linguistic Society of America.
- Bloch, B. & E. H. Jorden (1945) *Spoken Japanese Book One*. New York: H. Holt.
- Chamberlain, B. H. (1888) *A Handbook of Colloquial Japanese*. London and Tokyo: Trübner.
- Chiba, T. (1935). *A study of accent: reserch into its nature and scope in the light of experimental phonetics*. Tokyo: Fuzanbo.
- Henderson, H. G. (1943) *Handbook of Japanese Grammar*. Boston: Houghton Mifflin.
- Mizutani, O. & Mizutani, N. (1977) *An introduction to Modern Japanese*. Tokyo: Japan Times.
- Naganuma, N. (1950) *Naganuma's Basic Japanese Course*. Tokyo: Kaitakusha.
- Suski, P. M. (1942) *Conjugation of Japanese Verbs*. South Pasadena: P.D. and Ione Perkins.
- Tatsumi, H. S. (1936) *Simplified Grammar Table of the Spoken Japanese: A Complete Grammar Condensed on One Chart*. Tokyo: Unknown.
- Yamagiwa, J. K. (1942) *Modern Conversational Japanese*. New York and London: McGraw-Hill Book Company.
- Web Site (2023 年 10 月 17 日閲覧)
- 東京外国語大学 (2017) 「千葉勉と東京外国語学校音声学実験室」[html].
- Retrieved from <http://www.tufs.ac.jp/common/archives/pamphlet-chibatsutomu.pdf>